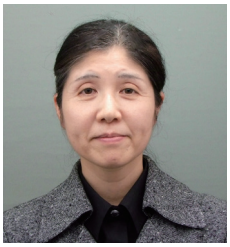
高齢の方が使いやすいモノづくりの検証・提案を通して豊かな高齢社会の実現を目指す『みんラボ』



「高齢者による使いやすさ検証実践センターの開発」は、筑波大学大学院人間系心理学域 教授・原田 悦子先生を研究代表者とする研究開発プロジェクトです。

情報化と高齢化が急速に進んだ日本。タブレット型端末、パソコンのようにそれまでのライフスタイルを変えてしまうような新しい機器やモノがたくさん生まれ、生活が便利で豊かになる一方で、複雑な操作性を要求され、取扱説明書の分厚さや複雑さにゲンナリしてしまうことも多いのも事実です。

原田先生は、誰にとっても使いやすいモノや機器を作るために、「高齢者の方にとってそのモノはどんなふうに使いにくいのか」を明らかにすることを目指し、平成 24 年 4 月、つくば市に「みんなの使いやすさラボ（通称：みんラボ）」を開設しました。開設からもうすぐ 1 年を迎える平成 25 年 3 月、みんラボを訪ねました。

■誰にとっても使いやすいモノづくりの提案を目指して

「みんなの使いやすさラボ（通称：みんラボ）」は、つくばエクスプレスの「つくば駅」から徒歩 10 分、大きなドラッグストアの入るビルの 2 F にあります。平成 24 年 4 月に開設、使いやすさの検証実験に協力する平均年齢約 68 歳の「ボランティア登録会員」は、平成 25 年 3 月現在 170 名に達しています。

事務所入口の右手に外国製のコーヒーサーバーが置かれていました。「ご自由にどうぞ」と言われ、（本格的！）と思ったのもつかの間、（どうやって使うのだろう？）という戸惑いが生じました。専用のコインを投入し、いろいろな種類のパックの中から「カプチーノ」を選び、試行錯誤の末なんとかサーバーにセットしてスタート。「あれ？」泡立ったミルクしか出てきません。どうやら失敗したようです。

「カプチーノを作るにはサーバーを二回使うんです。初めにコーヒーを入れ、二回目にミルクのパックをセットします。これも研究の一環で、使用経験のないモノをどのようにして使っていくのか、周りの人とどう関わるのか、高齢の方と若者でどう異なるのかなどを、天井に設置したカメラで撮影し、分析します」と話すのは、筑波大学特別研究員の安達さんです。

コーヒーサーバー。右横のモニターに、天井カメラからの映像が映し出されている。

「一般に『高齢者は電子機器が苦手』と言われます。確かにその傾向はありますが、これまでの研究から、多くの高齢者が使いづらい“悪いデザイン”のモノは、若い人もスムーズに使えないことがわかっています。このコーヒーサーバーも使うのは難しかったでしょう？「みんラボ」にご協力いただくのは高齢者の方ですが、高齢者の方だけではなく誰にとっても使いやすいモノづくりを可能にするための取り組みです。企業という枠の外、中立的な立場で利用者の声を聞く組織であることも大きな特徴です」（原田先生）

■活動から新しい形のコミュニティを生み出す

テスティングルームに置かれた複合機。「『コピーを取る』テストはできる人が多いですが、『スキャンしてパソコンに送る』とか『製本してホチキス止めする』など複雑な操作についても検証しています」（安達さん）

みんラボには検証実験を行う防音のテスティングルームと、実験の様子を外から観察するためのモニタールームがあります。これまで IH 炊飯器やハンドブレンダーなど多様なモノの使いやすさの検証実験を行ってきました。

「一年目は使いやすさの検証実験と、使いやすさについて会員が自由に討論する会（みんラボカフェ）や講習会の開催を中心に活動してきました。今年度は『みんラボ研究員プロジェクト』をスタートします。テーマを決めてチームを作り、あるモノの使いやすさについて調査や議論を行い，提案をしていくサークル活動のようなイメージです。第一弾は「使いやすい大学病院を考える」です。このような活動を通して地域に新しい形のコミュニティを創ることができるのではないかということにも注目しています」（原田先生）

開設二年目を迎えた「みんラボ」。これからの活動の広がりが楽しみです。